

---

**N o w I w e a r a h a t a n d w e s t e r n b o o t s**

さすらい物書き

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

Now I wear a hat and western boots

### 【コード】

N2600B

### 【作者名】

さすらい物書き

### 【あらすじ】

生まれ育った街を出たことがないリオは、愛馬カクタスと旅に出る。幼い頃に隠した地図に記された場所を目指して。孤独と自由と、音楽による心のふれあいを描いた、旅の物語。

Now I wear a hat and western boots

Now I wear a hat and western boots

(前書き)

この物語は、BENNEIKの新曲“Joy Trip”に触発されて衝動的に書きはじめ、様々な想いを詰め込んで作り上げた作品です。西部の風の匂いを感じただけだと嬉しいです。

つまり、彼女は馬上の人となったのだ。

まだ辺りは夜の気配がしがみついているような、朝まだきの時間帯。

動いているのはリオと、これから彼女の長い旅路に同行するカクタスだけだ。

長い付き合いの彼の背中も、新調して数ヶ月経ってなじんできた馬具の座り心地もすこぶる調子が良い。

朝霧が広く漂っている。辺りにリズムのいい蹄の音が響く。

シナモン色のカウボーイハット。

タバコブラウンの履き慣れた革のブーツ。

そして、今ではあつらえたように手の平になじむ、腰のガンベルトに収まった愛用のコルト銃。

なんのために旅になんか行くの？

なんの意味があつて？

なんの目的があつて？

そうみんなに聞かれて、いろいろ答えてたけど、どれもホントの自分の気持ちではなかった気がする。リオはそう思っていた。

「旅に出たいから、旅に出たいの」

それが、彼女の素直な気持ちだったのだ。

リオは「じゃあね」とつぶやき、相棒の手綱を引いた。

その簡単な言葉が、生まれ育った街への別れのあいさつの全てだった。

それでいい。

それでいいのだ。

さあ、旅に出よう。

旅立つことを決めたのはあの地図が原因だ。

地図は、リオが幼い頃に故郷の街へやって来た、旅の拳銃使いが持っていたものだった。

その頃は月に数回の割合で、数人組の野盗がやって来ては食糧や金品を奪いに来ていたため、用心棒として流れの二人組の拳銃使いを雇ったのだ。

一人はいかつい顔の、髪を丸坊主にした全身黒づくめの男で、もう一人は目の大きな、片脚に銃弾を受けた傷を持った女好きの男だった。

男勝りだったリオはよく彼らに旅の武勇伝を話すようせがんでいた。はじめは煙たがっていた拳銃使いたちだったが、数週間もすると退屈のぎに相手をしてくれるようになった。

彼女は頼み込み、銃の撃ち方も習った。

丸坊主の男は早撃ちの名手で、片脚に傷を持つ男は遠撃ちの名手だった。

リオは銃の扱いの筋がよかった。

歴戦の銃の使い手から直接手ほどきを受けた彼女の銃さばきはそのうち大人顔負けになっていったのだが、あるとき銃を触っているのを父親に見つかり、手ひどくお仕置きを受けてからは触れぬようになった。

地図を持っていたのは丸坊主の拳銃使いだった。

手癖の悪かった彼女はその地図を盗んだ。

地図にはリオが住んでいるこの街の名もあり、街からは遠くに見えるだけで行ったことなどない山や谷や河の場所も名称もきちんと記されていた。

そして、街からずいぶん離れた場所を指す部分に、赤い丸印が記されていたのだ。

リオは三日間かけて、生まれてはじめての大冒険の支度をした。

赤い丸印の場所へ。

そこにはなにがあるのかわからないし、そもそもリオはとなり街までしか行ったことがない。地図上での数インチが実際の何ヤードに相当するかなんてわかるはずがなかった。

朝の太陽が地平線から顔を出す前に家を出て、朝も昼も歩き続けた。

だけど、広い荒野はいつこつにその景色を変えない。

夕方近くになり、彼女は興奮から冷め、急に恐ろしくなってきた。

道を帰っていったのだ。

幼い頃の彼女が大冒険だと感じたあの一日がかりの旅は、大人の脚を持ってすれば二時間程度の道程だった。

家に帰り着くと、心配した両親が抱きしめてくれた。  
悪いことをしたと思った。

盗んだ地図が見つかるのが怖くなって、瓶に詰め、コルクで栓をして、自分しか知らない場所にその地図を隠した。  
そして、そのままにしていた。

二人組の拳銃使いは、街にごろつきが寄りつかなくなり、また要請していた保安官がきちんと配置されたことでお役後免になったため、街を去っていった。

丸坊主の拳銃使いは地図のことに気づいていない様子だった。  
なくしたことに気づいていないのか、それとも単に不要な代物だったのかは彼女にはわからなかった。

ただ、彼女はあとでこのことをとても後悔した。

旅の拳銃使いはあの地図を頼りに旅を続ける予定だったのではないのか？

わたしが旅を盗んだせいで、彼は旅の目的地を見失ってしまうのではないのか？

わたしは彼の人生にとんでもない被害を与えてしまったのではないのか？

むろん幼い彼女の頭にそのような難しい単語が並んだわけではないが、漠然とそのような罪悪感が生まれ、それから彼女の心に重くのしかかり続けたのだった。

彼女はそれから人の物を盗るようなことは一度もしなくなつた。

数年ぶりに、街の酒場の裏の、外壁のレンガのすき間から取り出した瓶から出てきた地図は、色がすっかり褪せて、古文書のような風合いになっていた。

18年ぶりに、あの赤い丸印の場所を目指す。

朝霧が晴れてきた。

朝ぼらけの時間帯。未練がましくしがみついていた夜の気配も霧散していく。

この景色は　　リオは思った。  
そうだ。

幼い頃に歩いてきて、怖くなって引き返したあの場所だ。  
あの思い出の場所までやって来たのだ。

わたしはここから先へはまだ一度も出たことがない。  
この一歩は、重要だ　　そう思った。

カクタスはその頼もしい歩調を乱すことなく、まっすぐに歩いていく。  
思っていたよりもあっけなかつたし、特別な感慨は浮かんでこなかつた。

だけどやっぱり、特別な一歩だ。  
だって、胸がこんなにドキドキしている。

まっすぐに伸びた道。

恐ろしくなるほどその両手を広げている地平線。

旅に出たという実感が胸の底に生まれてくる気がした。

ターコイズブルーの遠い空と、赤茶けた大地、ときおり生えている低木と雑草。

風が西から吹いている。彼女たちが向かう方向から吹く強い風は、おいでおいでと手招きしているような気もするし、故郷に帰れと警告しているような気もする。

誰かのために生きている気がしていた。

家族のため。

街のみんなのため。

わたしを好きだといってくれたあの人のため。

わたしのこれまでの人生は、誰が見てもほめてもらえるような日々だったのだと思う。

わたしのこれからの旅の日々は、誰からもほめてはもらえない日々になるだろう。

だけど、後悔はしない。

この旅立ちを選んだ自分を、わたしだけはほめてあげたいと思っている。

カクタスが低くないないた。

首を少しだけ振って、わたしのことを気遣ってくれている。

大丈夫だよカクタス。涙は出てるけど、悲しくて泣いてるんじゃない

ないから。

河に沿ってカクタスとリオは進む。

河の水は日の光を反射させてきらめいている。

河まで馬では下りられないので、リオは手綱をゆるく引つ張りながら「カクタス、止まるよ」と声をかけた。

馬から下りると、リオはシナモン色のカウボーイハットを脱ぎ、川縁へ下りた。ハットを河の流れで軽くすすぎ、水をなみなみとついで、元の道まで戻る。水は半分くらいにこぼれてしまったが、カクタスは器用に鼻面をハットに突っ込み、水を飲んだ。

リオは男装していた。

一人旅するのは男でも危険なのに、女の一人旅など普通じゃ考えられない。護衛付きの駅馬車に乗って、安全な街から安全な街へ移動する以外の旅をする女などまずいない。流れながらの旅などもない。つてのほかだ。

彼女は長かった髪の毛を思い切って短くし、手作りの付け髭をあとに貼った。人がいるところでは常にカウボーイハットは目深に被るようにし、鹿皮服の肩の部分にはパットを入れて体格をごまかした。

もともと身長が519フィート（注：約173cm）もあり、声も低い方でもあった。

女の一人旅があまりに非常識な分だけ、逆にそう簡単にはバレないだろうと踏んだのだった。

今日の夜は、野宿することになるだろう。隣の街までは距離があ

りすぎる。

見上げるような巨大なサボテンが立っている横を進む。

「……大きいなあ」

思わずそうつぶやいた。

誰もいない荒野に立つサボテンは、長身のリオの6倍以上の背の高さがある。

夕焼けに、小さくきれいな白い花が照らされていた。

真つ正面の地平線に、丸い、赤い火の玉のような太陽が沈んでいく。

太陽と地平線がふれ合う。

空はいつものようにまっ赤に染まり、荒野は紫色に変わっていく。

低い、丘のような山を越えた辺りで、野営するのに都合のいい場所を見つけた。明日はこの大きな峰の山腹を登ることになる。山を越えれば街が見えてくるはずだ。

空を見上げると、ツグミが二羽、巣に戻るため飛んでいた。

焚き木を集め、ガンベルトで硫黄マッチを擦って火を点ける。今宵のディナーは乾し肉と、豆のスープとコーヒーだ。

カクタスは、道すがら草を食べて食事としているので、晩ご飯はなしだった。

焚き火に水を入れたやかんをくべる。

リオは麻の袋からこげ茶色の牛の肉片を取り出すと、ちぎって口に放り込む。

旅の初日の夜空には、数えきれない星の群れがまたたいている。辺りの低い松の茂みにも星明かりが映っていて、風で茂みが揺れる

と、はじめられた星の光が辺りに光の屑をまき散らすような気がした。

“ 真の孤独の味を知る者は、真の自由を知る ”

リオは幼い頃、目の大きな拳銃使いが云っていた言葉を思い出していた。

“ いいかいリオ 。ひとりぼっちになることを恐れて孤独にならない者は、決して自分の夢を叶えることはできないんだ。夢への道つてのは、孤独を楽しめる者にだけはつきり見えるんだよ ”

その言葉を聞いたときはなんのことだか全くわからなかったけど、今なら少しだけ意味がわかる気がする。

近い上空で、鷹が鋭い警戒の声をあげた。びくつとして身をこわばらせてしまう。

遠くの森では、コヨーテの吠える声がぼんやりとこだましていて、リオは（今夜はたぶん眠れないな）と覚悟する。

口の中に広がる乾し肉から出る汁がのどに染み入るほど美味しい。豆のスープも、家で食べるより、今の渴いた口には美味しく感じる。コーヒー豆を拳銃の柄の部分ですりつぶして、越し布に放り込むと沸騰したやかんのお湯を注ぐ。

リオは孤独な物思いに耽りながら、熱いコーヒーをすすった。

朝の光の眩しさに、眠りこけていたリオは目を覚まされた。

夜中まではなかなか寝付けなかったが、深夜になるとさすがに旅の疲れから、眠りの世界に引きずり込まれてしまったのだ。

おかげで、疲れはすっかりとれて、身体には活力が戻ってきている。

朝もやを通過した斜光が、岩肌に当たって朝のみずみずしい光を照り返している。

リオはカクタスに水を飲ませると、手早く鍋やブランケットをまとめてカクタスに背負わせ、自らもその背にまたがった。

「さ、今日もよろしくね、カクタス」

峰をのぼり、砂と岩の道を進む。ときおり身がすくむほどの絶壁の横を通って冷や汗をかいたり、道を間違って崖に突き当たったりもしたが、なんとか昼前には山を下ることができた。

今日のうちに、隣の街まで着けそうだ。

コンパスで進むべき方向を確認する。

うん、方角は間違っていない。

今日も天気がいい。

数時間後、リオとカクタスは遠くに街の姿を確認することができた。

「もう少し頑張ってねカクタス。そしたら休めるから愛馬にそう話しかけた。」

街の入り口に着いた。

カクタスから下り、ハットを目深にかぶり直すと、手綱を引きながら街に入っていく。

きちんとした服装をした愛想のいい老人が寄ってきた。

流れ者のわたしに出迎え？

「ようこそ、ホイールウインドへ！」

笑顔でその声をかけてくれる。

「こんにちは」

低い声色で彼女も一応そう返事をした。

「ちよいと失礼しますよ」

老人はそうことわると、手早くメジャーを取り出し、彼女の背丈と肩幅をささつと計った。

「え、なに？」

「いやいや、気になさらないでください。それではお気をつけて！」

そう云い残し、老人は姿を消した。

一体なんだったのだらう。それに、やっと街に到着したのに、お気をつけてとは挨拶もおかしくないだらうか。

まずは宿を探そう。

リオは目抜き通りの中央付近に立つ二階建ての酒場の前でカクタスを止め、留め木に手綱をくくりつけた。

酒場のスイングドアを押して中に入る。

カウンターに二人、テーブルに三人の男がいる。みなカウボーイハットをかぶっている。カウンターのむこうにはバーテンダーがいる。みな、いつせいにリオの方を見た。

湿ったおがくずが撒いてある床を進む。

すばやく店内を見わたす。珍しく、ステージみたいな場所が設けてある。

痰壺が置いてあるのはどの街の酒場も一緒なんだな、と考えながら、バーテンダーに「一杯頼む。それと、風呂のある部屋も」と低い声で告げた。

バーテンダーはショットグラスにバーボンを注ぐとリオの前に置き、金額を答えた。

リオはグラスを一気にあおると、部屋の鍵を受けとり「ごちそうさん」と云い残して階段を上がった。

質素だが清潔な部屋だった。

二日ぶりに水を浴びると身体も気持ちもさっぱりして、もうちょっと酒を飲みたくなった。

女の一人旅で、夜に一人で酒を飲むのはやはり少し不用心な気はしたが、人と話すことなく進んできたこの二日間が彼女を大胆にしていた。

幸いこの街の酒場にたちの悪い悪漢はいなかった。

たまたま今日がそういう運のいい日だっただけかもしれないが、結果的に彼女は渴いたのどにビールを流し込み、熱い羊の肉にかぶりつくことができ、美味しいバーボンに酔うことができた。

夜の酒場はとて多くの客でにぎわっていた。男たちだけでなく女たちも多かった。ポーカーに興じる者、飲み比べをしている者、店の端ではひげ剃りをしてもらっている客もいた。

旅の疲れと酒のアルコールが彼女の身体を包みこみ、陽気な客たちの楽しい話声や孤独に冷えていた心をほぐしはじめていた頃、彼女は一人の若者に声をかけられた。

「見ない顔だね。名前はなんて云うの？」

ちょっと生意気そうな、世間知らずな雰囲気のある若者だ。陽気な口調でそうたずねる。リオは「ビル」とだけ答えて、コーヒーをすすめる。

「ビルか。オレはチョコ、よろしく。……風邪でもひいてるのか？  
声が変わるな。ま、せっかくこの街に来たんだから、オレたちの演奏

を聴いていつてくれよ」

チコと名乗った男はステージに上がると太鼓の前に座った。チコ以外にも二人、ステージに上がる。両手を太鼓の上に添える。

店内が少しだけ静かになった。

そして、演奏がはじまった。

故郷の街では、聞いたことのない音とリズムだと思った瞬間、自分の中の血液が騒ぎ出すような感覚に襲われた。

穏やかであやすような手つきから、だんだんと力強く、乱暴な手つきに変化していく。太鼓の音の表情も、チコの叩く手によって響きを変える。

太鼓の音に、バンジョーの軽快なメロディーが加わった。

リオは、踊り出したいような心地よい衝動を感じていた。

ステージ近くに座っていた踊り子が、変な声を上げて踊り出した。それにつられて身なりのよい男も仲間に声をかけて踊り出し、みるみる間に店内は音楽とダンスのるつぼと化した。

リオは自分も踊り出したくなるのを必死でこらえて（だつてさすがにダンスをすれば女だつてことがばれてしまう）、チコの手が生み出すリズムを聴き、人々の楽しいげな宴を遠巻きに眺めていた。

酔いと清潔なベッドのおかげでぐっすり眠れるかと思つたが、なぜか寝つきは悪く、明け方頃になってから眠りについたため、起きたときには10時近くになっていた。

顔を洗い、歯を磨き、髪を整え、着替える。

首にはネックチーフを巻く。使い込んでいてもとは濃い赤だった

のが今ではずいぶん色落ちして薄くなっている。

ウエスタンブーツは脚を守るためのものだ。この靴は履きはじめて二年近くになる。固い革のブーツは最初に履いたときはちよっときつく感じた。だけど革靴は履きならす履き物だ。今ではもう他の靴は履けないと思ってしまっうほどに足に馴染んでいる。

そして、色も形も気に入っている、丈夫なカウボーイハットをかぶる。

さあ。旅を続けよう。

\* \* \*

リオとカクタスの旅は続き、ちょうど1ヶ月が経つころ、リオは男装をやめた。

女でも、態度に気をつけていれば大丈夫だと、経験でわかってきたからだ。

次の街に着いた。

故郷を旅立って6つ目の街だ。

カクタスの背に乗ったまま街の通りを通る。

身なりの細身の男が「景気はいかがですか」と挨拶してきた。リオは「オケラだよ」と無愛想に答えた。

「それと、棺桶は必要ないよ。生きて出て行くからな」

男はその返事を聞くと、なにも云わずに去っていった。

リオは街に着くと、まず保安官事務所へ向かうことにしていた。事務所の様子や保安官の顔つきで、その街の治安がいかほどか見て取るのだ。

この街はちよつとだけ乱れているような気がした。

酒場では、たまに「ねえちゃんひと晩いくらで付き合っかい？」などと下卑たことをたずねてくる男がいるが、そのときは早撃ちの名人直伝の、電光石火の速抜きで拳銃をガンベルトから抜き額に突きつけてやると黙り込む。今日もそんな男がいたが、いつものように黙らせた。

そして、夜は出歩かぬようにして、部屋にきちんと鍵をかけて休んだ。

一面、トウモロコシ畑が広がっている。

風が吹き抜ける。豊かなトウモロコシ畑を渡る風は甘い香りがある。

これが、金持ち風というやつか、と彼女は思った。

拳銃使いが云っていた。風には二種類ある。

一つは金持ち風、もうひとつは貧乏風。

トウモロコシ畑や小麦畑を吹き抜ける気持ちのいいこの風は、土地に富をもたらす風だと云われているそうだ。

一方の貧乏風は、木造の納屋を吹っ飛ばすトルネードや、砂漠に吹き荒れる砂嵐のことを呼ぶらしい。

今は、甘い香りの緑色の風が穏やかに吹いている。

リオは気分が良くなって、カクタスの背中で歌い始めた。

道は長く どこまでも続く

山越え 河越え 谷越えて

だけど ぼくは自分の道を見つけるだろう

自分の心に従って このほこりまみれの平原を渡っていく

ぼくが我が家と呼べる場所にたどり着くまで

次の日はひどい砂嵐に見舞われた。

首に巻いたネツカチーフをはずして、鼻と口を覆うように巻き直す。

風が少し防げる岩陰を見つけて、そこでリオとカクタスは砂嵐をやり過ごした。

\* \* \*

さらにひと月が経つころ、リオとカクタスはとある街にたどり着いた。

今日は街のお祭りだという。大きな街で、人もたくさんいる。街には人々の楽しげな声と音楽が溢れていた。

くすんだ銀色の、星形のバッチをした保安官がライフルを持ち、二人の保安官助手が保安官について見回りをしているが、彼らの穏やかな表情を見ると、この街もさほど危険はないとリオは判断した。

大変な賑わいだった。日は暮れているのに街の子どもも奇声を上げながら走り回り、老人たちも楽しげに騒いでいる。街の男も女も、旅の流れ者も、楽団が奏でる調子の良い音楽と歌に合わせて踊っている。

「旅の人？」

若い女に声をかけられた。きれいな顔立ちだ。小綺麗だが、決して豪華ではない身なりと化粧をしてないことに好感を覚える。

「うん、そうだよ。相棒の馬と、こいつと一緒にね」

リオはそう云ってガンベルトから銃を抜いて器用にくるくると回してみせる。

「女の人の一人旅か、……カッコイイね！ あたし、エマ。あなたは？」

エマと名乗った娘がそうたずねるので「私はリオ」と返事をした。屈託なく娘は笑うと、

「リオ、ね、一緒に踊ろ？」

そう云ってリオの手をひいて、なかば無理矢理にステージに引っ張り上げた。

見た目と違ってけっこう力がある。

「ヒーハー！」

エマが叫ぶ。周りの男も女もその声に呼んで「ヒーハー！」と叫ぶ。

「さあ、リオ。踊ろっ！」

旅に出てから、拳銃と同様常に身に帯びている「警戒心」というある意味旅に一番大切な心得を、今夜だけは少し忘れてみても大丈夫なのかな。エマの顔を見ているとそんな気分になってきた。

「……わかった」

「やった！」

エマがにやりと笑う。可愛い表情だ。自分よりかなり若いと思っていたが、ひよっとすると同じくらい歳のかもしれない。心が若いと、表情も若くなるのだろうか。

ウエスタンブーツが舞台の床を踏むとき、何とも云えない響きが伝わってくる。ながれている曲はシンブルな曲調で、リオがリズムを覚えるのにそう時間はかからなかった。エマが、ステップのコツを教えてくれる。この街の伝統のダンスだそうだ。ダンスをの振りを覚えるのに5分とかからなかった。

汗が流れる。汗が目に入って、踊っているみんなの姿が一瞬にじむ。

ネツカチーフをはずして汗をぬぐうと、そのままポケットにしまった。

ステージの上で踊る人間はあきらかに増えていた。ステージに上がりがきれいな者たちはステージの周りで踊っている。

曲のある場所に来たら、みんなで声を合わせて「ヒー、ハー！」と叫ぶ。リオも、みなと一緒に「ヒー、ハー！」と声をあげ続けた。

ここでは街の者も旅人も関係なかった。一緒くたになって音の洪水にのみ込まれ、一体化していくような感覚だ。

エマも汗をびっしょりかいて、リオと背中合わせで踊っている。まわりの者と身体が触れあうが、不快感はなかった。

流れている曲がついにクライマックスを迎えた。音楽がスピードアップし、それにつれてダンスも限界まで速くなる。

汗が流れ落ちるのが心地よかった。見ると、エマも上気した顔でステップを踏んでいる。

最後にみなぎ声を合わせて「ヒー、ハー！」と叫んで曲が終わった。

「リオ！」

「エマ」

息を切らせて、今夜限りのダンスのパートナーの名を呼び合う。

「リオ、けっこう踊れるね」

「ありがと。すごい祭だね。こんな楽しんだの、久しぶりだ」

ホントは、こんなに心から楽しんだのは、生まれてはじめてかもしれない。

二人が次の言葉を発するよりも早く、次の曲の演奏がはじまった。「休みなし？」

リオがあきれたような声を出す。

「まだ踊り足りないでしょ？ お祭りはまだはじまったばかりだよ！」

エマが、リオの心を見透かしたような表情でそう云った。

今度の曲はさっきの曲よりスローテンポだった。ステージからは人は減っていない。再びリオとエマは背中をくっつけて踊る。

曲調は穏やかで、音も静かだった。エマの息づかいが聞こえる程度に。激しく踊った自分の心臓の音も聞こえる。

もっと耳を澄ませると、エマの心臓の音も聞こえる気がした。

いや、聞こえてるんじゃないやなくて触れあう身体を伝わって響いてくるんだ。

旅だったばかりのころに酒場で聞いたチコという若者の太鼓のリズムを思い出した。

太鼓が生み出すリズムも、鼓動が生み出すリズムも、遠い遠い昔から続いてきた同じリズムなのかもしれないと、リオは思った。

スローテンポの曲も終わり、次はハーモニカが美しい旋律を奏で始めた。

街の祭は、夜更けまで続いた。

\* \* \*

「ねえ、カクタス」

リオがカクタスの背中から話しかける。

「……わたしね。旅に出てよかったよ」

見渡す限りに広がる広大な荒野。なにもない大地が途方もなく続いていっていると感ずるときもある。

だけど、何も無い場所にいるときにこそ、自分の本当の心の声が聞こえてくることを、リオは知ることができた。

色褪せた古地図に赤い丸印で記された場所までは、まだしばらくかかりそうだ。

だけど、この旅は目的に着くための旅じゃない。

行ったことのない街を、会ったことのない人を、聴いたことのない音楽を、見たことない景色を、そして世界を。

行って、出会って、聞いて、見て、感じる。

それが旅の目的なのかもしれない。

そして一番大切なのは、世界の中心にはいつも自分がいるってことに気づくことだ。

Now I wear a hat and western boots

旅は、地図の上のどの場所においても、わたしはわたしと一緒にだといふ当たり前のことに気づかせてくれた。

シナモン色のカウボーイハット。

タバコブラウンの履き慣れた革のブーツ。

腰のガンベルトのコルト銃。

そして、相棒のカクタスと、わたし。

いい仲間たちだ。

さあ。

行けるところまで、カクタスと行こう。

遙かな荒野に、今日も紫色の夕日が広がっていく。

さあ。

どこまでも、どこまでも、旅を続けよう。

(後書き)

短編にしては長くなってしまいました。お読みいただきありがとうございます。ございます。

この物語を読まれた方は、ぜひ、本作の「原作」であるBENNIE Kのシングル「Joy Trip」を聴いてみてください。曲を聴いていただいた瞬間、モノクロの映像に色彩が入るように鮮やかな世界が広がるものと思います。

また、作中に登場するリオが歌っている歌の歌詞は、榎原敬之の全編英語詩の曲「COWBOY」の一節を、僕が勝手に日本語訳してアレンジして使用しております。ですので、正確に云うと二つの曲から生まれた二次創作作品であることとなります。

今日12月9日は、僕がこの「小説家になろう」で執筆活動をはじめめて1周年の日であり、この新たな旅立ちの日に“旅立ち”をテーマに作られた曲を元にした物語を投稿することができて、すごく幸せです。

BENNIE Kが新しい音楽の世界の旅をはじめたように、僕も新たな小説世界の旅を歩きはじめたいと思います。今後ともよろしくお願い致します！ 平成18年12月9日 さすらい物書き

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2600b/>

---

Now I wear a hat and western boots

2008年11月7日07時25分発行

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。